

ミネアポリス空港の入国審査

僕の名前は野村敏貴。髪は男らしく短め、身長178cm、腹筋ワレ・ワレの美しい肉体美を持つピンピン・ビシビシの21歳です。北海道・岩見沢で父とコメ、麦、大豆、タマネギを生産しています。

昨年は僕にとって感動と感激の一年でした。その一つがあの人から「**本場の金髪・ブルーアイを見てきなさい**」と言われ続けてきたことを実現できたのです。昨年9月から10月中旬まで1カ月間、米国中西部の農場で大豆収穫とコーン収穫を手伝うことになりました。

やっぱり、豊かな国、米国の農業ってすごかったですよ。だって、**すべてがドカーンで、ドーダこの野郎なんです!**

2回目の海外ともなると然したる緊張感もなく、淡々と米国行きの準備を進めていましたが、予報では出発当日の天気は怪しく台風が成田を通過するようだったので、予約したチケットを捨て、新規のチケットを購入して前日に成田入りしました。首尾よく成田発747機はギリギリで台風をかわして飛び立つことができたのですが、もし千歳、成田間の航空券1万円をケチって前泊していなかったら、と考えると農業と同じ

く決断の大切さを学んだ次第です。

デルタのエコノミー・シートは僕の身長では窮屈だろうと聞いていたので、追加料金1万5000円を支払い、少しレッグ・スペースのあるシートの選択をしました。初めて経験する時差ボケ状態で12時間のフライトを終え、穀物メジャーのカーギル本社も近いミネアポリス空港に着いたから入国審査を受ける時にチョットしたトラブルになりました。

僕の流ちょうなニュージランド訛りの英語に係員が困っている様子で、別室に行き再度、聴取となりましたが、今度の係員は僕の英語を理解できたようでした。事前にこんなこともあるかと思ひ、あの人からはホストファミリーではなく、日本人受け入れに慣れている現地のトラクター・ディーラーの人の連絡先を聞いていたので、関係書類に係員に見せると連絡を取り、無事入国スタンプを押してくれました。もちろん後ほど彼にはお礼として米国の国酒ともいえるパーボンを持参しました。

あなたは、**バッド・ガールだ!**

Vol.71



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

そういえば衝撃的なことが……。ウソをつけて入国はできませんという清教徒の国を実感することがあったのです。

同じ聴取を受けた部屋には**25歳くらいの東洋系の女性が**呼ばれていました。雰囲気日本人と少し違っていたので、日本語で話しかけるのをタメらい、少し事の成り行きを眺めていたら突然、入国係員が「**ユーアー・ア・バッド**・

**オレにも
言わせる!**

**北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信**

「ガール!」と罵り始めたのです。そして強制送還しますと追加の措置があり、10年間は米国に入国できませんと告げられたのです。彼女は半べそになるかと思いきや覚悟を決めていたようで、表情も変えずに今来た道を係員に付き添われてスタスタと戻り、到着したばかりの成田行きのデルタ機に乗り込む姿を私は眺めていました。

彼女は韓国のパスポートを持っていました。なぜ強制送還になったのでしょうか。麻葉の密輸? テロリスト? まさか大和撫子のしなやかなテクである日本ブランドを利用して金髪・アイの男どもを喜ばせようとした産地偽装行為? その後の税関検査では手荷物を徹底的に調べられ靴まで脱がされましたが、無事ホストファミリーが待っている、さらに北の北緯47度ファーフ行きの飛行機に乗ることができました。

ギンギンの若い日本人男子が一人で中西部に来る理由は早々ないので、審査や検査が厳しくなることはある程度分かっていましたし、あの人からは作業着、作業靴、手袋など労働を思わせる物は持参するなど事前に指示がありました。お土産の申告も100ドルを超えて申告すると10%の税金がかかるので注意することも忘れませんでした。

豊かな国の農業の本髄

実は米国の関係法令順守のため、農作業を経験することで小遣いも含めて一切の金銭の授受はありませんでした。あくまでも自己責任で米国中西部農業の本髄を感じてやろうと言う意気込みで行ってきたのです。

9月15日に到着して1週間ほどは雑用的な仕事ばかりでしたが、後から考えてみるとそれ自体がすごい経験だったのです。デカイコンバインで収穫が始まると思っていたのですが、昨年よりも積算温度が低いようで、収穫が始まる9月下旬までは機械の整備や暗渠作業

がメインでした。暗渠というのは水はけが悪い畑に直径20cmくらいのプラスチック製パイプを400馬力のトラクターを時には2台使って強制的に土の下1mくらいの所に埋設します。北海道では被覆材として麦わらや火山れき、砂利などをパイプの上に敷設しますが、この中西部ではパイプ表面に布のような保護材が巻いてあり、土がパイプの中に入らないようにしています。もしかしたら、この技術は北海道にも普及するのかもしれないところではあります。

ポールはホストファミリーのボスで、お茶目な25歳の息子マイクがいます。身長が私よりも低い170cm

で、ノースダコタ州立大学の女子大生と付き合っていて、日本ではどんなアプローチをするのかなど、まさかのボーイズ・トークの相談役も務めることになりました。経営規模は1100haで、この辺では中の中くらいの面積ですが、周りでは営農を辞める農家がいるので5年後には1500haになるそうで、それに合わせた経営をやっていく、具体的にはトラクター、コンバイン、作業機械、乾燥機、倉庫に2ミリオンドル以上の投資することに興奮すると話していました。

そういえば僕の英語はニュージールランド訛りがあると書きました。そうなんです。一昨年から昨年の春まで、ニュージールランドで農業研修をしていたのです。現地ではリング収穫や牧場の仕事をしました。たぶん初めて世界観を学んだのだと思います。アジアの若い研修生たちは流暢に英語を話しますが、僕たち日本人は全く会話ができませんでした。このままではマズイと考え、魔法使いサリーちゃんのようにホウキに跨り、品のない一発芸をやる現地の人たちには大ウケでしたが、戦後の日本人のような生真面目なマレーシア人にはヒンシユク系だったようで、文化の違い? それとも余裕ある豊かさの蓄積の違い? を

感じました。本当は同じ町に住む同級生からも米国話を聞いていたもので、ニュージールランド行きをタメラッていました。それなりに貴重な経験をしたと思いましたが、やはり豊かな農業が存在する米国にはとても興味がありました。関係する組織や先生たちにも相談したのですが、「米国は絶対ダメだ! ニュージールランドに行きなさい」と半ば強制されたのです。今もってその理由は分かりません。

たとえば左翼系の記者が反米記事を書いて、ご自分の子供がキューバや北京の大学に留学するのだったら誰も文句は言いませんが、反米なのに米国で国際関係学を学ぶため、ノーベル賞を16人も輩出するジョン・ホプキンス大学に留学するのはやはりおかしいですよ? ってことは日本国民には反米思想を植え付けておいて、自分の子供たちにはやはり米国が世界の中心であることをこそそり教え、将来、自分たちだけが資本主義の甘い汁を吸おうなどと考える、不潔でキモイ連中にはなりたくありませんね。

そういえば米国体験が終わり、ファーフの飛行場でこんなうれいことを言われました。「これから収穫が忙しくなるから、来週戻って来いや♡」